

# 2

## 第2回

## 子どもの成長・発達と生活環境

### 第2章



■主催・チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、お茶の水女子大学G・COE  
■共催・㈱ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所  
■後援・中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会  
日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

East Asia Child Science  
Exchange Program

① 中国人から見た「小皇帝の涙」  
発達認知神経科学と早期教育  
② 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1：日本から見た「中国の子どものいま」  
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」  
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ  
⑧ シンポジウム2：日中比較子ども・発達・文化

## 基調講演

# 中国人から見た「小皇帝の涙」

朱家雄

Zhu Jiaxiong  
華東師範大学教授

※「小皇帝の涙」…2008年1月6日、NHKスペシャル「激流中国」のシリーズ第9回として放送されたドキュメンタリー番組。教育ブームが過熱する中で、一人っ子である子どもたちを叱咤激励し、愛の鞭も惜しまない親たちに対し、悩みや苦しみを訴え始める子どもたちの様子が描かれました。

## ●一人っ子政策と中国

中国では70年代の後半から、一人っ子政策が実施されるようになり、すでに30年ぐらい経ちました。この政策の実施で人口がある程度コントロールされた反面、どの家庭も一人しか育てられないので、子どもの生活環境も大きく変わり、いろんな問題が起きています。そのことについては社会全体が強い関心を抱いています。

NHKが撮影した「小皇帝の涙」というドキュメンタリーは、中国で、今どんなことが起こっているのか、これからどんなことが起きようとしているのかを如実に現れていると思います。このドキュメンタリーを見て、私自身が子育ての中で経験した、いろんなことを思い出させてもらいました。私がこのドキュメンタリーを見てどんな感想をもったのか。学際的にいくつかの角度から述べてみたいと思います。

## ●教育学者としての見方

私は、教育を専門としていますが、教育学、心理学、医学を研究する立場の人は、このようなやり方は、非人道的だと判断するだろうと思います。やはり、「子どもたちの発達に対して害がある。子どもたちには楽しい子ども時代を過ごさせてあげるべきだ」という感想をもたれると思います。

子どもにとって子ども時代は少ししかありません。だから、子どもにはたくさん経験をさせて、遊びの中で発達を促していくことが重要です。そうすることで子どもの健全な人格形成ができるのです——教育学者と心理学者は、そのように発達の角度からこの問題を否定的にとらえるだろうと思います。

この「小皇帝の涙」の中で紹介されている状況は、本当に中国のど

の地方でも見られるものだと思います。先ほども何人かで議論しまして、都会と田舎では状況が違うのではないかとという意見も出しましたが、私は中国のどこに行ってもこれと同じような状況が起きていると答えました。

中国では、改革開放政策が実施されてから20年以上経ちましたが、我々も、このような状況を非常に憂慮して、子ども本位の教育改革を実施して、状況を変えようと考えています。特に幼児教育の分野で、いろいろな改革も行われています。

このドキュメンタリーの中でも、中国の高官は、「現状を変えなければならぬ。子どもの負担を軽減させなければならぬ」というコメントを発表したのですが、中国の現状から言えば、このような状況はなかなか改善されないのではないかと、私は予測しています。

## ●東西文化という視点から

これから、違う角度からこの問題をとらえてみようと思います。生態学や人類学の研究者のようにマクロな研究を行う人の立場から、この問題を考えてみましょう。それから、東西文化の教育の価値観の比較を通じて、なぜ中国ではそのような状況が起きたのかを説明してみたいと思います。

教育の問題は価値観の問題でもあると思います。西洋文化は、個人を強調して、民主、自由を何よりも大切だと考えています。しかし、中国は、集団が大切だと考えています。孔子の教えは今でも中国では深く浸透しています。中華文化の中では、道徳階級制度が最も大切に

思われているのです。今でも、階級意識や階級制度は、すべての中国人の心の中に深く根づいています。

ここ数年の努力で、中国社会でもいろんな変化が起きています。例えば上下関係は、昔は一方的な関係でしたが、今は双方向的になっているのです。しかし、そのように若干の変化はあっても、基本的なものとは変わっていないと思います。

中国の家庭にもこのような意識は深く浸透しています。つまり、家庭の安定は、子どもの自主的な意思ではなくて、保護者の権威によって維持されています。部下が上司に従うことは、中国では忠誠心があることだと言われています。また、子どもが親に従うことは、親孝行と言われています。中国の社会は、まさにこの忠誠心と親孝行の意識によって維持されています。

西洋文化は個人を尊重して、個性の自由、個人の権利、機会の平等、選択の自由、道徳の自主的な形成などを提唱していますが、中華文化は全くその反対ですね。集団を尊び、家族の誉れ、社会における地位をととても重視します。

## ●価値観の根本にある「乖」

中国の親に対してどこに教育の重点を置いているかを、一つの文字で表してもらおうと、「乖(クワイ)」という文字が浮かびます。この字は「従う」「服従する」「親の言うことを聞く」「上の人の言うことを聞く」という意味です。この字は中国人の言論、行為に多大な影響を与えています。

たとえ西洋文化を深く受け入れていても、自分の子どもに関してはいつもそれを要求しています。例えば、私は西洋のものにいろいろ接触しているのですが、自分の子どもに対してはこれを強調していません。「言うことを聞け」ということです。

中国で今、教育改革が進められています。幼児教育においても、中学校の教育改革においても、自主意識を育てることが強調されています。しかし、なかなかうまくいかない。というのは、この自主意識は中国の伝統的な文化の最も根本的なものと相反するものだからです。

私は子ども学会が主催する会議に出席したとき、ある講演に非常に興味を感じました。その講演者は、絵を掲げて、ドイツで経験したことをお話になりました。

ある子どもがおもちゃを集めています。そして、親が「このおもちゃはどこから来たの」と子どもに聞いたら、「お友達から買い取った」と答えたと言います。親が「なぜお友達からおもちゃを買ったの」と責めたら、「それは自分のことだ。あなたとは関係ない」と答えたということです。このような親子の会話はドイツでは当たり前だと思われると思いますが、もし中国で同じようなことがあつたら、その子どもはしつけを受けていない、教養のない子どもだと思われまます。

ですから、教育の問題を考えると、基本的な文化のことも考えなければならぬと思います。教育は文化の一部であるため、文化的アプローチで解決するしかないと思います。ですから、西洋のものをすべて取り入れる、システムを全部西洋的なものに変えることはあり得

ないと思います。それは必ず壁にぶつかって、うまくいかないと考えます。

もちろん文化は単一的なものではありません。常にまじり合ったり移り変わったりしています。例えば、階級意識の強い中国の伝統的な文化の中でも、いろいろな変化が起きていますし、個人を重んじている西洋文化の中でもいろいろな変化が起きています。しかし、お互いに学び合うことはできても、完全に相手と同じになることは絶対ないと思います。

とてもおもしろい絵をお見せします。ここには「水の存在を最後に知らされたのは魚である」とあります。我々は文化の中で生きていますが、自分の置かれている文化環境を往々にして忘れがちなのです。

### ●政治家と保護者の立場から

これからは政治家の角度からこの問題を考えてみたいと思います。私はいろいろなベテランの教育研究者とつき合うことがあるのですが、彼らは次のように私に言います。「我々は教育の問題についてたくさんの研究を行いました。政治家は全然我々の意見に耳を傾けてはくれぬのです。彼らは自分の政治的目的に従って教育改革を行っているのです」と。それで、私は、それは当たり前だと彼らに言いました。政治家にとって一番重要なのは、社会の安定と国の競争力を高めることだからです。

例えば、アメリカでは早期段階における読み書き計算能力の強化という政策が打ち出されました。なぜそのような提唱がなされたのかと

いいますと、早い段階から読み書き計算能力の強化をすれば、たとえ貧しい家庭の子どもでも小学校では絶対に落ちこぼれない。また、中間階級出身の子どもたちと大体同じレベルの教育が受けられる。そうなれば、社会からの反発が弱まると政治家たちは考えたのです。

つまり、政治家たちは社会の対立を解消し、社会の安定を維持するという立場でこの教育の問題を考えているのです。彼らは決して一人ひとりの子どもの立場に立って物事を考えるわけではありません。

それでは、保護者の立場に立つとどんなことを思うでしょうか。我々は『小皇帝の涙』を見ました。親たちの心のうちも聞きました。親としてはもちろん自分の子どもに小さい頃から苦労はさせたくないという気持ちがあります。でも、最終的にはスタートラインで差をつけられたくない、また今後のレースでも誰にも負けたくないようにしたいという気持ちがあると思います。

### ● 小皇帝の幸せを考える立場から

私はいままで4つの角度からこの『小皇帝の涙』を分析しましたが、私のメールには「小皇帝の立場でこの問題を見てもらえないか」という書き込みがありました。では、なぜ私は小皇帝の立場でこの問題を話してないのかといいますと、私も知らないからです。もちろん私は子どもたちに聞いてみたりすることはできるのですが、恐らく彼らは次のように答えるでしょう。「私は本当につらい。もう泣きたくない。遊びたい」と。でも、今の彼らの感想を知ることができて、将来彼らがどのように考えるかということはなかなかわからないのです。

おそらく彼らは今いっぱい遊んでしまえば、大きくなったらかえって親に文句を言うのではないかと思います。「なぜ私が子どものとき、もっと勉強するように言ってくれなかったのか。私はもう今、地位も低い。お金もない。そのような生活しかできない」と。

もちろん私は具体的な調査を行ったことはいませんが、次のような対照的な事例があつて、このような考え方をもちようになったのです。

私のように教育や心理学の研究者の中には、自分の子どもを教育するときも西洋のやり方を取り入れていることが多いのです。しかし、彼らの子どもの多くは大きくなったら社会の競争の中で失敗していきす。

その一方で、外ではこのようなやり方はよくない、もっと子どもたちを自由にさせたいというようなことを堂々とやっているが、自宅に帰ったら自分の子どもの前では全く違う行動をとり、とても厳しく勉強させている研究者も多いのです。そして、彼らの子どもには成功した人が多いですね。

きょうは5つの角度からこの問題について話しましたが、おそらく第6、第7の角度もあるのだと思います。違う角度からは、違う問題点が浮かび上がってくるかもしれません。ですから、私の話を聞いて、皆さまの間でもっといろいろな議論が生まれれば大変ありがたいと思います。ありがとうございました。

① 中国人から見た「小皇帝の涙」  
② 発達認知神経科学と早期教育  
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1：日本から見た「中国の子どものいま」  
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」  
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ  
⑧ シンポジウム2：日中比較「子ども・発達・文化」

# 発達認知神経科学と早期教育

秦 金亮

Qin Jintiang  
浙江師範大学杭州幼児師範学院院長

子どもは何を学ぶべきか、何が学べるのか、いつ学ぶのか、どう教えるのが一番良いのか。これらは、全ての教育者が直面する最も基本的な問題であり、教育研究の永遠のテーマです。

また、どんな要素が子どもの発達に影響を与えるのかという問いは、発達心理学がずっと関心を注いできた問題です。近年、学問分野の垣根が取れ、子どもの発達は学問の枠を超えて研究されるようになりました。そして、学問分野の視野が広がる中、特に子どもの心理と行動の発達の神経メカニズムが最も重要な基点の一つとなっています。

子どもの発達の本質から見れば、教育の根本的な目的は、子どもの心理に調和の取れた発達を促すことにあります。心理の発達のバロメーターとは、バランスの取れた神経メカニズムの発達です。つまり、子どもの心理の変化は、全て神経メカニズムに根拠を見つけることができます。これが、発達認知神経科学が、子どもの発達研究において重視される理由です。

ここでは、発達認知神経科学の3つの理論、「成熟理論」「技能学習理論」「交互式特化理論」を重点的に紹介します。発達認知神経科学研究は、研究倫理の制約と研究技術レベルの制

限から、未だに子どもの心理発達のメカニズムを全面的に深く掘り下げ提示するには至っていないが、現在行なわれている早期教育に対して、以下の点を示してきています。

1. 発達神経科学は、過去の「ブラックボックス理論」を改め、教育実践に堅実な科学的基礎を提供する。
2. 神経の発育・成長の可塑性は、早期教育の生涯教育における位置について科学的根拠を提供する。
3. 神経の発育成長の主な敏感期は幼児期にあるので、早期教育を重視しなければなら

らない。

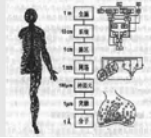
4. 神経の発育と脳の発育を促進するために、時期と内容のふさわしい教育環境を重視するべきである。

5. 発達異常の神経メカニズム研究は、早期特殊教育および神経回復のために科学的根拠を提供する。

発達認知神経科学は、まだ始まったばかりですが、その理論的立場や思考方式、技術手段において旺盛な学問分野的生命力をしっかりと築いています。将来必ず、小児科学臨床的実践、早期教育の実践、子どもの社会的福祉、子どもの看護のために、確実な科学的根拠と新しい発達理念をもたらししてくれるに違いありません。

### 発達認知神経科学の学問分野的位置

認知科学(Cognitive science)は、知能の実体とその環境との相互作用の原理を研究する科学である。  
知能の実体とは人類や動物、知能機体の総称である。  
人類の知能研究には認知心理学と言語心理学がある；  
動物の知能研究には動物心理学と比較心理学がある；  
機器機能の研究には計算機科学があり、特に人工知能学と人工神経ネットワークというものがある。



④

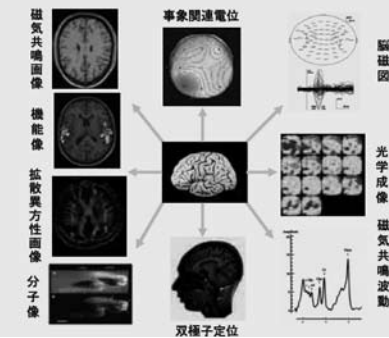
### 一、発達認知神経科学の確立を示すもの

発達認知神経科学の概念は、アメリカの研究者ネルソン(Nelson)が『子どもの発達と神経科学』という論文の中で提出したものである。2000年、ネルソン主編による第一冊めの『発達認知神経科学手冊』(《Handbook of Developmental Cognitive Neuroscience》)が作られ、それが発達認知神経科学確立を示すものだと見なされている。このハンドブックが出版されるとすぐに、1984年のMillerとGazzaniga編『認知神経科学手冊』に匹敵する画期的書物であると称賛された。



①

④



⑤

ネルソンの『発達認知神経科学手冊』は、全部で8つの部分から構成されている：

- (1) 発達神経生物学の基礎；
- (2) 発達認知神経科学の研究方法；
- (3) 発達神経の可塑性；
- (4) 感覚と感覚運動システム；
- (5) 言語；
- (6) 認知；
- (7) 障害神経の発達の臨床；
- (8) 情緒と認知の相互作用。



②

④

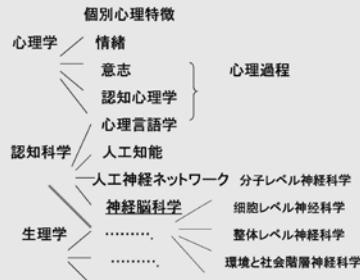
### 五、発達認知神経科学研究の乳幼児教育への示唆



教育研究が脳科学と認知神経科学の基礎の上に築かれるべきならば、子どもの早期教育は、発達認知神経科学の基礎の上に築かれるべきだと言えよう。

⑥

### 二、発達認知神経科学の出発点



③

④

① 中国人から見た「小皇帝の涙」  
発達認知神経科学と早期教育  
② 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

③ シンポジウム1：日本から見た「中国の子どものいま」  
④ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」  
⑤ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑥ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ  
⑦ シンポジウム2：日中比較子ども・発達・文化

# 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

黄紹文

Huang Shaowen  
長沙師範専科学校副教授

本校（中国湖南省長沙師範専科学校）の幼稚園教諭を育成するプログラムや実践を中心に、ご報告を申し上げます。

## 1. 市場のニーズに合わせて、養成目標を明確にする

専攻を幼稚園教諭の職業に緊密に結びつけることで、幼稚園教諭の組織と一緒に幼稚園教諭市場の変化や動向を分析し、「子どもを愛すること、しっかりととした基礎、適用できる理論、熟練した技能、高い指導・教育能力」という養成目標を掲げた。

## 2. 人材養成のための環境を作り出す

理論と実践の両面の能力を併せもつ教師陣の養成、実習場の整備（数・規模・機能において）、といった幼児教育の土台固めができる環境を作る。——写真①

## 3. 多彩豊富な職業能力養成課程を提供する

専門必修課程には、幼児教育の教師教養学・歌・演奏・踊りの演出と創作・幼稚園の環境設計などがあり、専門選択科目には、囲碁・チェス・オルフシステム・感覚統合訓練法・モンテッソーリ法・保育士研修などがある。——写真②

## 4. 課程の特徴に合わせて教授法を研究する

それぞれの課程には異なる教授法がある。専門理論科の授業では毎年、幼稚園での実践を通し、幼稚園が解決すべき問題を盛り込んだ教案を編成し、理論研究、幼稚園の事例分析、操作練習の方式で教授している。具体的にはまず、学生に理論をマスターさせて、実践を指導し、理論研究によって問題解決に取り組む。芸術課程では体験式教授法を採用し、声や表現に感情を込めることなど学生に体験させ、比較的短い時間で、学生に仕事の技能を身につけさせている。——写真③



## 5. 産・学・研が結びつき、学生の職業能力を育成する

① 幼稚園との学前教育専門人材育成共同研究法案。② 幼稚園との幼稚園課程の教材と教授法の共同研究。③ 幼稚園と共同で進める幼稚園関連書の教育研究。④ 幼稚園と協力して「理論と実践両面の能力を併せもつ」教師の養成。——写真④

## 6. 学内外が結びついた授業の質的評価システムを作る

学生の職業技能と芸術技能の級別審査制度を設け、学生が到達するべき最低基準を規定し、学生は自分の学習進度に応じて、自由に各等級の審査を受けることができる。同時に、卒業生の追跡制度をつくり、毎年実習先の幼稚園や校友会を通して、卒業生の状況を調査し、時期に応じてカリキュラムと授業内容を調整している。



① 保育現場の様子をハーフミラーで観察。



② 幼児教育における踊りの授業



③ 声や表情に感情を込めるレッスン



④ 学術シンポジウムの開催

- ① 中国人から見た「小皇帝の涙」
- ② 発達認知神経科学と早期教育
- ③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

- ④ シンポジウム1・日本から見た「中国の子どもたちのいま」
- ⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
- ⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

- ⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ
- ⑧ シンポジウム2・日中比較・子ども・発達・文化

## シンポジウム1

# 日本から見た

# 「中国の子どもたち」のいま

●司会……朱 家雄・榊原洋一

●シンポジスト(中国側)……秦 金亮・黄 紹文

●シンポジスト(日本側)……内田伸子・一色伸夫・山本登志哉・一見真理子

## 【朱家雄氏の講演について】

内田伸子

「各国の文化、社会、家庭、経済状況などによって、保育原理や教育原理の実現の仕方が異なり、文化という枠の中には絶対には同じ形で模倣できないという指摘はその通りだと思います」

「小皇帝たちが、『なぜもつと勉強させるような働きかけをしなかったのだ。そのために自分は社会的地位もなく、貧しい生活をしなくてはならない』と、将来親たちを非難する可能性もあるとい

う話にはハッとさせられました」

「やはりどうしても気になるのは、子どもへの見方がすべて成績だけ、学校の勉強だけになり、人格的なものや独創性のようなものをすべて度外視した生活の中で、広い視野、文明性といったようなものをきちんと育てていけるのか、ということです。成績という唯一つの物差しで計ってしまえば、その子もっている他の才能に気づくこともない。そのことの損失はとても大きいと思います」

山本登志哉

「中国の教育も、先生中心から子ども中心へとすくく変わってきています。しかし、ちよつとした先生と生徒の会話を聞くと、日本とは驚くほど違った内容になります。やはり文化の影響力のすごさを感じます」

「日本と中国のもつとも大きな違いは、競争の厳しさだと思います。日本では小中学生に競争社会の厳しさを露骨に示すことはしませんが、中国では社会の厳しさをダイレクトにどんどん見せています。そこで知りたくなるのは、これほど厳しい中国社会の中での人々の団結心というのは、どのようににはぐくまれるのかです」

一見真理子

「日本では集団の圧力の中で、出る釘は打たれるといつて、自己主張はできるだけ自己規制するものとなってしまいます。しかし、中国では、打たれば、打たれるほど釘が出てきます。子どもたちは厳しくされると、もつと自分を主張していく。その感じをビデオで知ることができたのはよかったと思います」

「私は評価基準(成功と失敗の基準など)を多元的に、豊かにすべきと思います。この番組で取り上げた家庭の場合は親御さんが、市場経済化す

る中国の中でリストラされていたり、自営業で苦  
労されているなど、その家庭の経済的な焦りが出  
ていると感じました」

「いま中国では資質教育が掲げられています。  
中国の文化の中で変えられない部分があるという  
マクロな見方を朱先生が提示してくださいました  
が、そのような中でも変化するものはあると思っ  
ます」

#### 一色伸夫

「朱先生は国や文化で価値観が違うという興味  
深い話を聞かせてくださいました。しかし、これ  
からの世界をもっと幸せなものにするためには、  
その違う部分をどう融合させていくのかについて  
も考えていかなければならないのではないでしょ  
うか」

「中国の子どもたち（小皇帝）の番組から、子  
どもたちは非常に厳しい状況下（勉強の負担、心  
の問題、強度のストレスなど）にあることが読み  
取れました。その背景には両親の我が子への思い、  
子どもの将来を思う親の熱意があります。この熱  
意の具体的な形は中国と日本で違っても変わらな  
いのです。私はこの点を大切にしたいと思います。  
かつて日本では社会問題として『教育ママ』とい  
うのがありました。教育ママは受験という戦場に、  
子どもたちを戦士として送り出すと非難されてま  
したが、私は親の子どもに対する熱意を強く感じま

した。人間が次の世代を育てていくのに一番大切  
なことだと思えます。」

「この親の子どもへの熱意をベースに、文化、  
世代、国家の違いを超えて子どもが豊かに育つ／  
育てるとはどういうことか、多様な視点で子ども  
をとらえる子ども学を出発点として両国が協力的  
で考えていくことが大切です」



初日のシンポジウムでは、  
日本側の4人のシンピジストから  
中国の研究者の発表に対する  
感想や質問が述べられました。

## 【秦金亮氏の講演について】

#### 内田伸子

「先生のご専門は発達神経科学でして、それを  
踏まえて幼児教育を行い、神経科学の視点で子ど  
もたちの発達を考える必要性については、私も賛  
同いたします。ただ、ここで気になりますのは、  
神経科学は血管の中に流れる結晶を見ると、  
非常にミクロなレベルで対象を分析していること  
です。しかし、発達心理学あるいは行動科学では  
全体を見るだけではなく、成育環境、対人関係、  
社会構造、文化のようなマクロなものを見るわけ  
です。ですから、神経科学と発達心理学などの  
ものの見方の乖離、ギャップをどう埋めていくのが  
気になります」

# 【黄紹文氏の講演について】

内田伸子

「実験自習機構を併設されて、ヘッドホンをつけて、保育のどのコーナーで何が起こったかをハーフミラーから観察できる施設があることは、うらやましく思いました」

「産・学共同の観点から、教員育成校と各地の幼稚園との緊密な連携が行われ、実践畑の方と理論を考える学校レベルの方が一体となって総合教育が行われていることに対して、大変敬意の念をいだきました」

「卒業生の追跡調査をされているということでした。これは質を担保するために、卒業生がどういうふう to 成長しているかを確かめるためかと思いますが、できれば学校の教育システムの評価にもぜひ活かしてほしいと思います」

一色伸夫

「黄先生は幼稚園では子どもたちの目はみな輝いているとおっしゃいましたが、その元気な子どもたちが小学校に入ると、勉強の辛さに涙すると思う、このギャップをどう考えたらいいのかかと思いました」

# 【質問へのコメント】

朱 家雄

「中国の教育問題は基礎の段階で如何に学力を向上するのかわけなく、教育を受ける機会を平等にするのところにあります。国家政策の最終的目標はごく一部の富裕層のためのものではなく、多くの庶民のためでなければなりません」

「我々中国人も子どもたちを苦勞させたくないですが、日本と違って学歴がなくてもなんとかやっていける状況ではなく、学歴がなければ一生厳しい環境に晒されます。中国の経済は日本と比べ物にならないので、教育問題を考える時に、この前提を無視して論じることができません」

秦 金亮

「我々教育学者、ソーシャルワーカーにとつて、もちろん勉強に追われて涙を流した子どもたちも注目しなければなりません、貧しさのために親に捨てられて、孤児となる子どもたちにもっと注意を向けるべきではないでしょうか。親に捨て

られて、一人で苦しみを噛み締める子どもたちは、ドキュメンタリーに出てきた子どもたちよりも遥かに不幸です。しかし、中国の農村で捨てられた子どもでもおそろくアフリカの子どもたちよりも幸せではないかと思えます。少なくとも、彼らは食べ物もあるし、着るものもあります。要するに、幸せというものは相対的なもので、絶対的なものではないということです」

黄 紹文

「会場から、中国の幼児教育についての質問がありました。中国では公立と私立の幼稚園と保育園があり、全日制のもあれば半日、定時制また寄宿制もあります」

「幼児教育に携わる教育者の社会的地位については、仕事が大変の上、給料は安く、社会的地位もそう高くありません。幼児教育にかかわる男性教育者は、幼児園、託児所ともにいますが、絶対数は多くありません」

① 中国人から見た「小皇帝の涙」  
発達認知神経科学と早期教育  
② 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1・日本から見た「中国の子どものいま」  
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」  
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ  
⑧ シンポジウム2・日中比較子ども・発達・文化

## 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」

山本登志哉

Yamanoto Toshiya  
早稲田大学教授

### ◎文化が与える制約

最初に少しお話をして、それからビデオを見ていただきたいと思います。なぜ、文化を無視した形で人間を理解することが不可能なのか、あるいは文化というものなしで人間が存在することが不可能なのかということについて、私はあまり理論的なことを多くお話するつもりはありません。具体的な事例を通して、私が実感したことを皆さんに少しでも感じていただけたらと思います。

最近、朱家雄先生が編集された『中国の視野のもとにおける幼児教育』という、就学前教育の本が出版されています。これを拝見すると、きょうのテーマの重要なポイントに当たることを書いていらつしやいます。その部分を最初に紹介したいと思います。

「幼稚園での教育実践において、私はその度ごとに、中国の幼稚園

で私が見る教育の情景、先生と子どもの状況、保護者の期待そしてそれらに関するすべてのことが、私たちが西側のいくつかの国で見たこととは異なるものだと感じた。私はその背後に、何とも茫漠としているにもかかわらず、取り去りがたいある力が、幼稚園教育の中で生ずるすべてに制約を与えていて、そのような内在的な力がしばしば外部から加えられる力を無力化してしまうということをかすかに感じとった。この発見によって、それが文化というものであり、文化は重層的な生息関係を通して就学前教育の実践に影響し、制約を与えているということに私は少しずつ気づかされたのである」。

朱家雄先生のご見解に私はとても共感するところが多くあります。現在、心理学などでも質的な研究が大きなテーマになっています。量的に分析するにとどまらず、人間の意味の世界に入っていくような、その質的な研究の重要性が言われています。

昨日の朱家雄先生のご発表の最後のところで、「水の存在を最後に知らされたのは魚である」ということをおっしゃいました。自分が生きていく環境というのは、自分ではなかなか気がつかないのですね。例えば、自分が日本のであるということを皆さんはどこまで日々感じているのでしょうか。

## ●中国の子どもたちへの違和感

さて、早速、皆さんにも少し体験をしていただくということ、中国北京市の幼児の様子をごらんいただきたいと思います。92年から中国に行き始めて、93年に本格的に比較研究を実施し始めたときに、北京師範大学の先生にいろいろお世話になって、たくさんのお教育機関を参観させていただきました。そこでビデオをたくさん撮りました。その中の一つの様子を皆さんにごらんいただきたいと思います。

### (ビデオ視聴)

幼児教育に携わっている方も少なからずいらっしゃると思うのですが、皆さんの3歳児のイメージと、今、ここで見ていただいた3歳児のイメージとは、どう違うでしょうか。入園したてです。1週間と経っていない感じの授業ですね。

私は、当時、信じられなかったですね。一日じゅう、朝からずうっと子どもたちが寝るまで観察させていただいたのですが、このビデオに登場された先生に「いやあ、すごいですね、みんな」と言ったら、

「いや、お恥ずかしいです。まだ、入ったばかりで何もできないので」とおっしゃったので、「ええっ！これでできるようになったら、どうなるの」と、私はびっくりしてしまっただけです。

さて、後日これを見て、日本の先生たちがどんなふうに関心したのでしょうか。

「なに、この子たち、ちゃんと座ってるじゃない！」「ひとつひとつの生活動作がとてもしっかりできている！」「まるで5歳児のよう！」と大騒ぎです。5歳児でもできないかもしれないと、びっくりしていました。

学生などにも見てもらったのですが、やはり違和感を抱くようでした。「なんか、子どもらしくない」「子どもは、もっと伸び伸びと、好き勝手に動いて、そもそも統率がとれないものだ。それこそが子どもだ」と言うんですね。「これは、まるで子どもでないみたいだ」「統制されていて軍隊みたい」「抑圧されていて、すべて指示で動き、これでは個性も自己主張も育たないのでは？」というような感想をもつようです。

## ●統制された教育が生む強い個性

日本の先生が幼稚園の現場でどういうことを大事にしているかといえますと、私の理解ですが、「子どもの目の線の高さに立つ」「そして大人は『正解』を押しつけず、子ども自身に答えを見つけてさせ、または子どもたち自身で解決させる」「そのため自分の気持ちを言葉で言わせ、また相手の気持ちも理解するように仕向ける」——そういうこと

だと思えます。しかし、そういう考え方で、今のさまざまな場面を理解しようとする、ちよつと矛盾に突き当たることに気がつきます。

何かというと、まず、日本的な感覚で考えれば、次のような図式が成立するはずで、抑圧・統制された集団教育で、個性と自主性が否定されると、自己主張をしない没個性的な人間が生まれてしまう。

さて、皆さんの中に、中国の留学生とおつき合いがある方、ないしは中国人とおつき合いのある方がどの程度いらつしやるかわかりませんが、私の感覚からすると、「自己主張できない。個性がない」などということとは信じられません。ものすごく自己主張が強いし、すごく個性的です。

よく見ると、ビデオの子どもたちは、結構、マイペースで動いています。さらに自己主張をかなりしつかりしているのです。一方、子どもたちの自主性みたいなことをすごく大事に育てられている日本の子どもたちはどうかというと、中国の子どもたちと比べると、自己主張はずつと弱いです。強い個性が育っているなどとはとても言えない。ということ、先ほどの理解の仕方では解釈できない問題がそこにあるということ。この矛盾をどう解いたらいいのでしょうか。

## ● 日中の性善説の違い

中国の場合、とても強く感じるのですが、先生はモデルでなければいけない、模範を示さなければならないという考え方がとても強い。一方、日本の場合は、そうではないと感じるのです。往々にして、むしろ子どもがモデルになっています。

幼児教育に当たっていらつしやる方は、結構、こういう感覚を共有しておられるのではないのでしょうか。「子どもの純真な心に比べて、私はなんて汚れてしまっているんだろう」と。私もそういうところがあります。そこを起点にいろいろ物考えるとい感じですね。こういう考え方が、割合、感覚的に強いような気がします。すべての人がそうだとは言いませんが。

少なくとも江戸時代ぐらいから、日本の教育の仕方や姿勢は中国とは違うように私には感じられて仕方がありません。そして、日本の性善説と中国の性善説とはずいぶん違うことに、あるとき気がつきました。

これは、江戸時代の子育てを研究された山住先生が言われていることの一つですが、日本の子育て観は木、樹木をすくすく育てるようなイメージをもっていた、というのです。あまり、変に外から手を加えてはいけないんだという児童観なり育児観が、いろんなところで見られます。

ところが、この性善説で理解しようすると、中国のことがわからなくなってしまう。小さいころから本当に鍛えますから。「何であそこまで、手をかけるの？ 子どもがつぶれちゃうんじゃない？」と僕は感じてしまいます。でも、考えてみると、「性善説」というのは、もともとは、日本ではなくて中国のもの、孟子のものなんです。訳がわからなくなったのですが、これを見たときに、「あ、そうなんだ」と、一挙に疑問が解きました。

これは、『三字経』という、宋の時代に成立した中国の初等教科書

です。3つの字を重ねることによって繰り返して中国の儒教思想の基本的な考え方や歴史の問題とか、関係する逸話なんかを紹介するものです。子どもたちは、まずこれを暗記するところから勉強を始めたわけですね。

## 日本の「性善説」と 中国の性善説

- 日本：  
子どもはもともとすばらしいものだから、その性質がそのまま育つことが大事。汚れた大人がへんに手をかけてはならない。
- 中国  
人之初、性本善。性相近、習相遠。  
苟不教、性之遷。……  
養不教、父之過。教不嚴、師之情。  
(三字經の冒頭の一部)

最初の言葉ですが、「人之初、性本善」、まあ、性善説です。「性相近」、人間の性質はもともと生まれたときにお互いにみんな同じようなものだと。ところが、「習相遠」、その後、いろんなことを経験することによって、学ぶことによって、外からの影響を受けることによって、お互い、本性はどんどん変わっていつてしまう。「苟不教」、もし教えることがなければ、「性之遷」、その人間の本性はどんどん移り変わってしまふ。移り変わる方向は、悪い方向にということです。

少し飛ばしますが、「養不教」、つまり、子どもに御飯をあげたり、服を着せたりして成長を助けるのだが、教育をしなければ、それは「父之過」、父親の過ちである。「教不嚴、師之情」、教えるときに厳しくなければ、それは先生が怠けていることだ。

つまり、中国の性善説は良い可能性をもつものを悪くしないよう徹底して鍛えるというもので、日本の性善説は良いのだからできるだけ手を加えずにと、全然逆方向の理解なのです。

それぞれ、さまざまな文化を知ること自身が豊かにすることだ。そういう過程が本当にお互いに大事になっています。「再発見」も、他者を通して再発見することがとても大事になっていると思います。それは昨日、朱先生がおっしゃったことと全く同じことではないかと勝手に想像していますが、朱先生の教育のあり方を日本の状況にちよつと当てはめて、こんなことが言えるかなと思ひ、きょうはお話をさせていただきます。



① 中国人から見た「小皇帝の涙」  
② 発達認知神経科学と早期教育  
③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1：日本から見た「中国の子どものいま」  
⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」  
⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

⑦ 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ  
⑧ シンポジウム2：日中比較子ども・発達・文化

## 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

首藤美香子

Suto Mikako

白梅学園大学准教授

私たちの子ども観・発達観・教育観は、社会・文化のなかで形成され、歴史的に変容するものです。今回は、中国の子ども観・発達観・教育観がどのようなものであったか、伝統小児医学、科挙制度、儒教思想や芸術など、さまざまな資料から考察してみたいと思います。

まず、単純な進歩史観への異議申し立てにより、巨視的な比較史の可能性が示唆されます。そのことにより、欧米とは異なる子ども観の歴史の多様性、可変性、相対性を描写することが可能になります。

また、子どもの上に交錯する複数の視線に注目することで、史料的な制約を克服し、「子ども主体の歴史」を追究することが可能になり、「子ども」と「大人」のインターアクティブな関係性の解明へとつながることができそうです。

さらに、「子どもの発見」といわれる近代のまなざしが、子どもの生自体に意味するものは何であるかを改めて省察することで、近代の

子ども観、発達観、教育観を脱構築することができます。

一方で、課題としては、歴史的な転換期の時期が不特定であること、構造的変化の過程が不明瞭であること、「子ども」「親」「教育」「家庭」等の用語と概念そのものの歴史的検証が不十分であることなどが挙げられます。また、史実の多様性と解釈の多様性が混在していて、特定の主題の解明に終始するだけで、不整合や矛盾が多く、そのために全体像の把握が困難になっていることも大きな課題と言えるでしょう。

### (1) 中国の子ども概念「子」「童」「幼」

「子」は生物的にみて、人生最初の時期。「童」は年長者に対する社会的身分。「幼」は徳や純粹無垢の質を体現したものです。

### (2) 伝統小児医学による子どもの発達観と陰陽五行論「変蒸」

中国には、隋・唐の時代から始まる小児医学の伝統が、大人の医学とは別に存在し、宇宙論である陰陽五行論を基礎に発展しました。

「変蒸」とは、乳幼児の成長発達と生理を宇宙論の数字で定量化・調和的で等価の陰陽の段階を表します。

### (3) 科挙制度における子どもの教育～早期からの知識教育重視～

もともと儒教においては日常生活の行為規範の習得が第一義であって、識字・読書はある程度年齢が上の余裕のある場合のみとされていましたが、科挙制度に対する対策として、早期からの知識重視が求められるようになりました。時代を経るにつれて、学習が低年齢化し、家長や親が一致団結して直接子どもの指導責任を負うようになっていきました。

### (4) 儒教の遊びに対する対照的な見解～朱子学VS陽明学～

宋の時代に成立した新儒教である朱子学では、人間の生理的肉体的な欲望を否定して、理性の成熟を求め、遊びの禁欲という形で、子ども観にも影響を与えました。一方で、朱子学を批判する形で登場した陽明学は、認識と実践の統一を重んじ、「心身愉快」「快樂」を学習意欲を引き出す主動因と考え、童心を賛美し、子どもの無垢性を保護しました。

### (5) 遊ぶ子どもの主題化（芸術）

「遊び」は朱子学と陽明学の争点のひとつですが、中国の歴史的な芸術作品を見ると、豊かな子どもの遊びの世界が展開しています。作品のカテゴリーとしては、芸術美を追求したもの、子孫繁栄・五穀豊穡の象徴として類型化されたもの、愛着と共感の対象として「騒がしい」子どもの生態を描写したものなどがあります。



こうした中国の子ども観の歴史を探索する試みは、子どもを「教育と保護の対象とみなす近代的な子ども観」の脱構築につながるだけでなく、欧米とは異なる「アジアの子ども観」を鮮明にしていける上で有意義であると思います。また、中国から大きな影響を受けてきた日本の子ども観と比較し、日本の子ども観の独自性や固有性を再発見していく契機ともなるのではないのでしょうか。さらには、現代中国における子どもの処遇（一人っ子政策とその影響）の特質と課題を歴史的な文脈の中で再検討する可能性も秘めていると言えます。

子ども観・発達観・教育観へのアプローチが、子どもの成長発達と生活環境のあり方を相対的に検証しようとする「子ども学」の一つとなり、日中双方が、子どもの具体的な生き様を包括的に理解し、新しい子ども—大人関係の気づき（築き）となることを願っています。

① 中国人から見た「小皇帝の涙」  
発達認知神経科学と早期教育  
幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

④ シンポジウム1・日本から見た「中国の子どものいま」  
日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」  
⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

# 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ ——うかびあがる諸問題——

一見真理子

Tehimi Mariko

国立教育政策研究所 総括研究官

## ● 幼児教育における日中関係の 出発点

私はこれからここ100年間の日本と中国の幼児教育上の関わりということで3つの時点にできるだけ集中してお話をさせていたいただきたいと思います。そして、そこから浮かび上がって来る問題点をとりあげてみます。

2003年、中華人民共和国の北京市では「中国の幼児教育百周年」の盛大な祝賀行事がとり行われました。それに合わせて立派な『中国の幼児教育の百年間（原題：百年中国幼教（1903・2003）』という書物が

記念出版されています。ここからわかりますが、中国では、1903年を近代幼児教育の出発点ととらえています。第1の日中の関わりは、近代幼児教育の出発点にあります。

中国で最初に幼稚園制度を導入したのは、清朝政府の高官で当時湖広総督であった張之洞という人物です。日本では在野の福沢諭吉が書いた『学問のすゝめ』にあたる『勸学篇』という書を著し、その中でぜひ「日本へ留学しなさい」と述べています。なぜなら同じ漢字文化圏で儒教圏にある日本が先行して摂取した制度や方法を学べば、はるばる欧米まで

行かなくても用が足るからで、当時の中国では、近代化をいかに急いでいたかがわかります。実際、この時期の留学ブーム以前に、官僚から民間人までかなり多くの中国人が日本視察にやってきました。見聞したことを『東遊日記』という形で発表しています。そのひとり、羅振玉という中国最初の教育ジャーナリストは、当時東京の女子高等師範付属幼稚園で展開していたフレールレベルの恩物を使った保育に注目しています。彼は自分が編集する『教育世界』という雑誌や『教育叢書』というシリーズで、お茶の水幼稚園の関信三がアメリカのカタログから日本向けにまとめたおした

恩物保育の図説『幼稚園法二十遊嬉』を、とくに中国化することなくそのまま載せて紹介しています。

一方、『勸学篇』の張之洞は、膝元で実際に幼稚園を開くことにし、『湖北幼稚園開弁章程』という、幼稚園の開設目的や運営方法に関する指針をまとめます。それが出たのが1903年なので、中国の近代幼児教育の歴史はここを起点にしているのです。今日のお茶大と中国の幼児教育の関わりには更に深いものがありました。張之洞は幼稚園を一から始めるために日本から女高師の卒業生である戸野美知恵以下3名の女性を招いています。海をわたって中国の奥地にまで赴き、幼児教育と女子教育をリードした女性は戸野らのほかにも何十人もいまして、その献身ぶりは現地の信頼を獲得しており、日本人としてこの史実を知って誇らしく思うのは私だけではないと思います。ちなみに、日本人女子教習の活躍は、明治日本の教育雑誌でかなり詳しく伝えられています（『近代日本のアジア教育認識・資料篇（中国の部）・明治後期教育雑誌所収 中国・韓国・台湾関係記事』龍溪書舎

2002を参照）。

## ●日本の倉橋惣三と中国の陳鶴琴

ここで第2の接点に入る前に、日中の幼児教育関係史上、直接の関わりはなかったのですが、ぜひ比較をしてみたらよいのではないかと二人の人物をあげておきます。日本の倉橋惣三と中国の陳鶴琴です。陳の方が10歳若いのですが、ほぼ同時代を生きた人だと言っていると思います。どちらもそれぞれの国のフレイベルと呼ばれ、しかも形骸化した恩物保育を乗り越えようとしています。バックグラウンドに心理学があって、それぞれの基地の実験幼稚園で実践を行い、多くの保育者を育て、現場と一体となった研究組織を作り、今日に繋がるような活動を展開しているところも共通します。2人とも子どもが大好きでよく遊んだところも似ています。ですが、実際に行った保育はというと、かなり持ち味というか風合いというか、どこか違うように思えてなりません。ここで詳しくは述べませんが、その違いはどのようなものか、なぜなのかをとともに考えてみるのは、今回のシンポ

ジウムのテーマに照らして大変興味深いことではないでしょうか。また、たとえば、倉橋惣三の系統的保育案ないしは誘導保育案、それから陳鶴琴の行ったプロジェクトメソッドの比較に日中双方でいちど本格的に取り組んでみることにしても、ここお茶の水女子大学で講演する貴重な機会をいただきましたので、ご提案しておきたいと思います。

## ●「紅いゆりかご」と寄宿制保育

それでは、日中幼児教育の関わりの第2点として、日本が中国にしかけた戦争が残した影響についてお話ししたいと思います。これは、中国でなぜ世界でもまれに見る寄宿制保育が誕生したのかのいきさつをお話しすることになります。

1930年代の中国では国民党政府と奥地に勢力を張る中国共産党政府が対立し内戦の状態にありました。そこに日本の侵攻があります。国共内戦の時代には逮捕され処刑されたり、戦場で命を落としたりした革命家が少なからずありました。その遺児たちを残った者は間違いなく育てあげること、彼らの犠

性を無駄にすまいとしました。それはまた革命のために後顧の憂いを残さない意味もありました。もちろん親代わりになった人たちも革命のために日夜活動していますので、こうした子どもたちを全面的に機関が保育する必要性があり、当時、根拠地の延安市には、寄宿制の保育院や小中学生の年齢まで預かる保育学校がありました。

また、日本の歴史教科書にはほとんど書かれていないのですが、日本軍の侵攻は当時国民政府のあった重慶市にまで及び大空襲による大変な被害が出ています。このとき超党派の女性による抗日統一戦線が動き始め、戦災孤児の救済と保育にも乗り出して、各地に保育院がつくられるようになります。これらも当然のことながら寄宿制です。私自身は寄宿制保育のある中国は、女性の自立を応援していると思うて研究をはじめたのですが、このいきさつを知るにつけ日本人としてはとても複雑ないたたまれない気持ちになり、またこのように子どもの利益を最優先して戦争の悲劇を乗り越えた中国女性の気概に感服してきた次第です。今日も存続する寄宿制保育の大

もとは革命と戦争の困難な時代にあったわけ  
で、これらは今、中国では「紅い（革命の）  
ゆりかご」と言われています。

## ● 日中幼児教育界の交流とその 中でうかび上がってきた諸問題

さて、第3の関わりですが、1980年代以降今日までをざっと見ることにします。日本と中華人民共和国は長いこと正式の国交がありませんでしたが、国交が正常化したのが1972年、当時中国はまだ文化大革命の最中でした。78年に平和友好条約が結ばれ、その後の「改革・開放」路線の中国とは、文字通りの交流が年を追うごとに盛んになっていきます。時間の関係で、日中幼児教育界の交流にどんな局面があるのかだけ、簡単に話したいと思います。

まず研究面に目をむけますと、日本保育学会と中国就学前教育学会の交流があります。OME P（世界幼児教育機構）中国委員会で、日本との交流を積極的に行ってきました。研究者の個々のレベルでは、例えば国際会議

参加や視察旅行を通じて、双方向で顔の見える交流を重ねてから、それぞれの在外研究や科研費共同研究などで一定期間、もっと腰をすえた研究活動を進める動きが出てまいりました。

それから、就学前機関同士でも交流があります。日本の幼稚園と中国の幼児園がさまざまに友好協定を結んでいて、熱心なところですと先生たちの行き来であるとか、また子どもたちの作品の交流であるとか、そうした関係を持っています。

中国教育界では、市場経済化（あるいはプライベートゼーション）が90年代の半ばにぐんと進み、それまでは公立か国营企業立、地域の集団立の園しかなかったところに、さまざまな私立幼稚園ができるようになってきました。当時「日本出資の私立幼稚園を中国につくりませんか」という話が日本の幼稚園業界にもちかけられることがありました。ただし日本の私立園は、学校法人で営利活動は認められません。ですので、東京の私立幼稚園の園長グループが、大型の出資をしない代わりに中国と対等の関係を結びながら「日中友好

園」という形で中身をつくり上げる交流を提案し、実践した例があります。その園は交流を通じて自らの課題のひとつを地域の乳幼児と保護者への保育サービスを充実させることに置き、その先進的な成果が表彰されて、喜びを日中で分かち合うひとこまもありました。

留学交流についても、最初の中国人留学生さんたちは、来日して25年以上の時間がたっていますので、日本に足場を築くか、帰国して指導的な立場にあります。国交回復後の留学交流の成果が更に現れるのはこれからです。実例を申ししましょう。中国で2001年に出た『幼児園教育指導要綱』は、子どもの遊ぶ権利や主体性を重視する画期的な内容ですが、その起草にも日本留学から帰国した専門家たちも入っていて、実際目に見えないところで日本の幼児教育のよいところも取り入れられていたりすることがよくあります。最後に、共同研究の中から見えつつある問題ということで、後の討論につながる問題点を申します。まず第1に、親のわが子に対する期待や就学前機関に対する期待が日中でか

なり違うという点。第2に、「遊び」と「学び」の関係が日中間で似ているようでいて大分違う、ということ。この2つと関連して、生涯発達を上げるための幼児期の在り方への考え方も大事だと意識する点で共通なのですが、方向性が異なるように思います。

第3に、同じ漢字圏ですが、「保育」、「早期教育」、「科学」などの言葉の意味する内容にやはり日中で相当のずれがあります。「子ども学」のよい中国語での訳語はなにか、これもずっと前からの宿題です。

それから、第4にここ十年以上気になっていることを申しますと、中国でも特別な支援の必要な子どもや、ストレスをため込み心身の症状に現われている子どもがやはり相当増えていて、この問題も日中共同で、しっかりと組上に載せた方がいいだろうと考えます。

日中の幅広い子ども学関係者が、経験を交流し研究課題を探る場が継続してあるべきで、このような子ども学交流の機会は積み重ねることが大変大事なのではないかと感じます。日中の幼児期をめぐる関係を見つめてきた者として、期待したいと思います。

- 1 中国人から見た「小皇帝の涙」  
発達認知神経科学と早期教育
- 2 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

- 4 シンポジウム1・日本から見た「中国の子どものいま」  
日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」
- 5 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

- 7 幼児教育における日中間係史・比較史のスケッチ
- 8 シンポジウム2・日中比較―子ども・発達・文化

## シンポジウム2

# 日中比較

# 「子ども・発達・文化」

- 司会……………内田伸子・秦金亮
- シンポジスト(中国側)……………朱家雄・黄紹文
- シンポジスト(日本側)……………榎原洋一・山本登志哉・一見真理子・首藤美香子

## 朱家雄

「首藤先生のご報告を聞いて、いろいろと考えさせられました。中国の宋・明・清の時代の哲学の視点に立って子ども学、子どもの問題、教育の問題を考えるのは、非常に有意義だと思います。」

「首藤先生が中国の儒教思想が東洋文化および日本文化に影響を与えたとおっしゃいました。一方で、近年の中国の教育改革では日本の教育や日本の発展が、子どもの問題をめぐる考え

に大きく影響を与えています。現在、中国で出された教育関連の報告はほとんど日本のコピーのようなものです。日本の教育や文化の発展には中国の影響が色濃くあるのに、現在の中国の教育改革には自分たちの文化を否定するような動きが見られます」

「山本先生の発表で日本は昔、大量の中国文化を受け入れていたとおっしゃっていました。しかし、明治維新以降、中国の文化を放棄し、西洋文明を受け入れるようになりました。日本人

が文化的アイデンティティの危機にさらされていたのではないかと私は思います。この危機は、具体的に何なのかを知りたいです」

「一見先生は発表の中で二人の重要な人物を取り上げました。日本の倉橋惣三先生と中国の陳鶴琴先生です。お二人の素晴らしいところは西洋の考え方をそれぞれ、中国や日本の文化に合わせて、中国や日本に適用するものに変えたところにあると言われています。彼らが進めてきた実践的教育法は、元々は西洋のものであると言われています。しかし、私は最近あることがきっかけでこの考えを変えました。陳鶴琴先生の関係者が彼の教育思想は中国人の立場や文化を考量した上で考案されたオリジナルなものであって、決して西洋のものを中国風にアレンジしたものではないと考えているからです。私は日本でも同じような問題があるのではないかと思いました」

「日本の研究者たちが日中の子どもの問題、幼児教育について詳しく研究されたことに関して尊敬しています。中国に帰ってから、このような研究態度を中国の研究者にお伝えしたいと思います。真の学者とは、自分の研究にこだわりと誇りをもつべきです。政府の意図を解釈するだけでは学者とはいえないと思います」

「日本の先生方がそれぞれの立場に立って、なさった研究はすべて素晴らしかったです。しかし、これは中国の現状そのものであるとは言いがたいです。一見先生が日中間の子ども教育の交流に対して、マクロな視点で明快な研究成果を挙げています。しかし、一見先生の研究内容もやはり研究者の主観的な視点が入っているように思えます。」

例えば、一見先生が日本人、また日本人研究者の立場から寄宿制幼稚園を考えて、論じていらっしゃると思いました。私はそれを聞いて、日本の方は寄宿制幼稚園のことをあまりポジティブに考えていないのではないかと印象を受けました」

榎原洋一

「私の専門の小児医学では、子ども総体ではなく、一人ひとりを個人として見ます。例えば、発達障害をもつ子どもについてどのような方法がいいのか、日本のやり方がいいのか、あるいは中国のやり方がいいのかについて、文化とは別の次元で議論することができると思っています。非常に大雑把にいうと子どもたちはそれぞれの文化の中で生きており、さまざまな歴史的背景があります。といても、医学的な視点から見ると一つの生物として存在しているという事実もあります」

山本登志哉

「朱先生が日本のアイデンティティ危機について質問されましたが、それは有効性が限界にきた欧米モデルの次が見えないことでしょう。この時代に改めて中国など他者との対比で日本を見つめ直す必要があります。たとえばお互いに迷惑を掛け合う篤い関係を重視する中国に対し、日本は迷惑をかけないことが大人の条件です。そこに欧米と異なる安定した日本的個人主義の倫理基準が見えます」

首藤美香子

「歴史・文化・思想を研究する人間に対して、自然科学を研究する方が『役に立たないことをやっているな、抽象的な議論をしてどう現実の問題を解決するのか』という印象をもたれるのは当然だと思います。また、中国の方からコメントがありましたように、外国人が研究する場合はどうしても実態の理解ができていないという印象をもたれるのは当然だと思います。しかし、人文科学の研究は、問題を相対化し、解決のための、選択肢の幅を広げるといった役割があります。意思決定の根拠を見直す一つのきっかけにもなると私は思います」

2日目のシンポジウムでは、2日間にわたる交流プログラム全体に関して、日中の研究者から、さまざまな意見をいただきました。

